

シンガポール

福島県立医科大学 地域・家庭医療部 後期研修医 鵜飼友彦

この度、幸運なことに平成22年度のシンガポール海外研修に参加する機会をいただいた。私にとって初めてのシンガポールで、刺激の多い5日間だった。

まず、はじめて海外の人に対して英語でプレゼンテーション行ったことだ。普段英語を使用しない者にとっては単純な内容を伝えるだけでも一苦勞であるが、せっかくなら相手にそれなりの情報を伝えたいと思い準備に取り組んだ。日本の医療の現状、今われわれが取り組んでいることを少しでも分かってもらえれば良かったと思う。日本語でも英語でもそうだが、プレゼンテーションの成功は結局、準備次第だ。その点から言えばもう少し念入りに準備できればよかったと思う。特に自由討論になると、なかなか思ったことが伝えられなかった。シンガポールの医師達も暇をもてあまして来てくれているわけではないので、こちらも「何かを伝えたい」という熱意をもって取り組まなければならないと思う。

2日目、3日目は Singapore General Hospital(SGH)の家庭医療科を訪問した。日本ではまだまだ未発達な家庭医療ではあるが、シンガポールでは社会の中で確固たる役割をはたしていた。時間は十分にあったので、普段から疑問に考えていることを質問したり、逆に質問されることで新たな気付きがあったりと、とても有意義に過ごせた。個人的には、一昨年から地域家庭医療部に所属し、アメリカ1週間、台湾1か月、と海外を訪れる機会を多くいただいているが、ディスカッションする内容の面でも、語学の面でも、発展が認められている気がして、今後の学習の励みになった。こういった所も海外研修の効果であろう。

私は特にシンガポールの医療保障制度に関心をもった。詳細は書かないが、日本との一番の違いは、使い古された感のある言葉だが、「自己責任」を国民に対してもとめていることであろう。国民は健康であるために努力しなさい、そのかわりだめなときは政府が面倒をみましよう、という意志が制度から感じられた。皆が全く平等というわけにはいかないが、その分選択の自由があった。日本の医療保障もシンガポールを見習うべきだ、と安易な事は言えないが、閉塞感に満ちている日本の医療に対して、シンガポールの医療が勢いをもって進んでいるように感じたのは、制度の違いも原因の一端か、と感じた。

以上思うままに書いてみたが、海外に行って、何か具体的な技術が身についたとか、医学知識がふえた、ということがなくても、考えさせられることは非常に多い。後はこれをどう今後の行動に移していくかだろう。それが若い我々に期待されている事だ。この研修を、糧にしてまた日々の診療に精進していきたい。

最後になりましたが、今回過保護ともいえるくらい手厚く支えていただいた福島県立医大関係者の皆様、そしてどこの馬の骨かも分からない我々を歓迎して下さった SGH の関係者の皆様に心から感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました。